

ひよくれんり 1

Chizuru & Masamune

なかゆんきなこ

Kinako Nakayun



エタニティ文庫

目次

ひよくれんり 1

書き下ろし番外編
新婚生活始まりの夜

ひよくれんり
1

プロローグ　　大人になれない大人　　

中学生になればお姉さんになれるって思っていた、小学生の頃。
高校生になれば。大学生になれば。

だけど成長するにつれ、思っていたほど大人になてなれない自分に首を傾^かげて。
でもこれってつまり、心は若いってことよね、若く見られるのはいいいことじゃん、と
開き直ったのは二十五歳を過ぎた辺りから。

おかしいな。二十歳を過ぎれば大人だっと思っていたのは、いつまでだったっけ？

法律的に、お酒を飲んでも許される歳ではある。

煙草^{たばこ}だって、法律的には吸えるようになった。(吸わないけど)

入ったことはないけど、レンタルショップのアダルトコーナーにだって入れる。

職場には自分より年上の人より年下の子が多くなつて、頼られるようになってなつてる。

それでも自分は本当に大人になれているのかな？　　って、首を傾げてしまうのはどう

してだろう？

ああ、心が若いわけじゃないんだなって気付いたのは、この頃。二十八歳になつて、
三十路^{みそじ}目前になつてから。

私^みがいつまでも自分を『大人』と思えないのは、子どもの頃想像していた『立派な大人』
ってやつに、なりきれしていないからなんだ。

私はいつ、あの頃思い描いていた『大人』になれるんだろう？

峰岸^{みねがし}千鶴。二十八歳。独身。彼氏なし。

身長は百五十二センチ。体重は……言えないな。

髪は肩上くらいまで伸ばしている。色素が薄いのは、母親譲^{やう}り。

現在、気ままな実家暮らし。父は商社勤め。母は専業主婦。弟は大学生。家族仲は
良好。

職場は二駅先の街にある書店。とはいっても正社員じゃない。パート。

パートのお給料でもやっていけるのは、ひとえに実家暮らしだから。

だけど、初めこそ娘可愛さに実家暮らしを選んだ私を喜んで受け入れてくれていた両親も、この歳まで結婚する気配もなく、そもそも男の影もないぐうたら娘に危機感を覚え始めたよう……

最近では、「早く出ていけ」とか、「子どもは若いうちに産んだ方が」なんて言われる。実家暮らしは楽だけど……

家族のことは、嫌いじゃないけど……

こう、触れられたくないところまでずかずかと入り込まれるから、少しだけ居心地が悪い。

「彼氏はいないのか」「誰か良い人は」が口癖みたいになってる両親。「人それぞれじゃん」って私を庇かばってくれる弟は、大学のある街で一人暮らし中。

味方はいない。

彼氏？ いまそんなよそんなの。

良い人……ならいますよわんさかと。好きな人ならいっぱいいるの。ちゃんと。

心はときめいてるよ。常に。

ただし……

私とは、違う次元の人達だけど……

私の好きな人は……この画面や紙の向こうにたーくさん。

そう、私……

俗に言う、オタクってやつなんで。

彼氏って存在がいたのは、いつ頃だったっけ？

ああ、あれは……まだ私がオタクを必死に隠していた中学生の頃。

どうして好意を寄せられたのかまったくわからなかったけど、隣のクラスの男の子に

「付き合ってほしい」って言われて、思わず「うん」って言ってしまった。

当時ハマってた漫画のキャラと同じテニス部で、ドキドキしたっけな。

でも付き合うって、具体的に何をするのか当時の私にはさっぱりわからなくて。

一緒に帰って周りに囁ささしたてられるのが怖くて、学校では付き合ってるってことを内緒にしていた。

休みの日は朝からアニメを見てゲームをして漫画を読んで、時にはイベントにも参加してって忙しくて。

ケータイもメールも普及していなかったあの頃。男の子がそっけなさすぎる私を見限るのにそう時間はかからなかった。

そんなほろ苦くも淡い恋（と呼ぶのもおこがましい気がするけど）を経て、私はますます自分の趣味にのめり込んでいった。ちょうど、同じ趣味の友達が増え始めたこともあってさ。仲間があると、よりいっそう盛り上がるものなのだ。この病は……

中学、高校はオタク一色の青春時代だったなあ。

今思うと、花の青春時代になにやってんだ！ って、当時の私を叱責しっせきしてやりたくない

るけど。でもあの頃はあの頃なりに、オタクライフを満喫まんきつしていた。ある意味、あれだって輝ける青春だよな。一般ピーポー（非オタクの意）には大声で言えない青春だけどさ。同人誌制作のために完徹かんてつ、とか。

高校を卒業してからも、「大学に入って環境も変わればオタクから抜け出せるのかな？」って思った瞬間（ええ、瞬間ですよ）もあったけど、私の専攻した学科の同級生の中にはよりコアな同志達がいったりして、抜け出すどころか、ますます深みにハマっていった。

もうね。二次元の男以上に私の胸を熱くさせる現実の男なんて、いないのですよ。

せいぜい二・五次元なんて呼ばれる俳優さん（ミュージカルとかのね！）や声優さん達くらい。

でも、より私の胸を熱くさせるのは……

「はあ……。やっぱりいいなあ、ヘタレ攻め×誘い受け」

男×男。

いわゆる『やおい』ってヤツ。

そう、私……オタクで、腐女子なんです。

突然のお見合い

それは五月の初旬。

世間が大型連休にやれ帰省だレジャーだと盛り上がっていた時のこと。

ゴールデンウィークはお店の繁忙期で、おまけに連休中は入荷の変動（前倒しや入荷のない日が続いたり……）があつて、お客様からの問い合わせや欠品のチェックや補充に大忙し。連休明けにはまた大量の入荷をさばかなきゃいけないから、大変大変。

本屋の仕事は意外に重労働だったりする。本屋の店員さんって、なんとなくこう……大人しくって本好きな文系イメージがあると思うんだけど（実際そういう人もいるけど）、本は重いし、とにかく数が多い。だから結構、肉体労働が多いのだ。

それにいろんなお客さんが来るから、ストレスも溜まる。

中には、タイトルともつかないうる覚えなキーワードだけで本を探せと、無理難題を言ってくる人もいて……。一度、「昨日新聞に載ってたあれよ、あれ！」とすごい剣幕で「本屋さんならわかるでしょ！」って、言われたことがあつたなあ……。いやいや、新聞だけで何紙あると思ってるんですか、そしてそれに載ってる本の広告どれだけ

あると思ってるんですか……とは言えず、必死にキーワードを聞き出したりしたけど結局……

ま、まあとにかく。大変なんだ、本屋の仕事は。そして薄給。労働内容の割に、時給は安い。

それでも本屋で働いているのは、やっぱり好きなものに囲まれていられるから。仕事なんてものは何を選んででも大体大変なんだから、せめて好きなものに携わっていいと思ったのだ。そして、本屋で働けば社割で本が買える！ これ、重要。

私の出費の大半を占める本の購入代を、少しでも浮かせられるんだから文句は言えないでしょう。でも、本屋で働いているとついつい新しい本に目移りしちゃって、結果、前よりたくさん本を買ってしまったている。うう……だって読みたいんだもの。そしてすぐ手の届く所にあるんだもの。

だから気になる本は、とりあえず取り置きしてしまおうんです……

そして今日も今日とて、取り置きしていた漫画と帰り際に一目惚れしちゃった本を買って、重い紙袋を手にかに帰った私。ああ……この重みが幸せだあ……

ふふふ。今日の夕飯はなんだろうなあ……？ お腹が空いたなあ。お肉が食べたい。そんな願いが通じたのか、夕飯には肉が出た。

母手作りの豚の生姜焼きを食べて、食後にゴルフ帰りの父が買ってきた柏餅を食べな

がら、買ったばかりの漫画を読む。

ああ、幸せ。一度も読んだことのない漫画を一巻から纏め読みするのって、すつこく幸せだと思う。大人買いで良かった……！ これ、面白いよう！

それに柏餅！ 熱々の日本茶に合うー！ うまし！
なんて、にやにやしながら漫画を読んでいたら、唐突に母が口を開いた。

「ねえ千鶴。あんた、次の土曜は休みだったわよね？」

「んー。そうだよ」

今のところはなんの予定もない、連休翌週の土曜日。

好きなだけ寝倒して、積んでたゲームを消化しようっと。むふふ。

「ちようどよかった。その日、お見合いすることになったから」

え？

オ、オミアイ？ なんだそれ。

「お、お母様？ 今、なんて」

うちの母、専業主婦の朱鷺子さんはお茶を啜りながら、しれっとのたまう。

「だから、お見合いよ。あんたの。いつまでたってもぐうたらして、結婚する気配が微

塵もないのよ〜って姉さんに愚痴ったら、『ちょうどいい話があるのよ!』ってね」

「はあ!? なんて勝手に決めるの!! 聞いてないよそんなの!!」

「当たり前でしょう? 今言ったもの」

「うぐっ」

ああ言えばこう言う。

ありえないでしょ、こんな漫画みたいな展開!!

「お見合いたいなんて言ったことないよ!!」

「言ったらもつと早く紹介してもらってたわよ。まったくあなたは、ほんとに腰の重い……」

「私、結婚する気なんて……」

「おだまりなさい」

キラリ、と母の目が光った気がした。

「あんた、もうすぐ三十なのよ?」

「……今時、三十過ぎても独身の女の女の人なんていっぱいいるし」

現に、私の周りの友人達は圧倒的に独身が多い。

だから、私もそんなに焦らずにいられたんだよなあ……

「いつまでも親のすねかじって、どうするつもりなの」

「うぐぐ……」

親のすねかじり。そこをつかれると痛い。

一応生活費は入れているけれど、実家を出て一人で生きていける収入を得ているのかというと、ちよつと怪しい……。少なくとも、今のように興味にお金をかける余裕はなくなるだろう。

「今はいいわよ。お父さんも元気なもの。でも、私達はあんたより先に死ぬの。あんた、今のままの収入で、独りで生きていけると思ってるの?」

「……………う……………」

「………なにも、今回の人とすぐに結婚しろって言うんじゃないのよ。まずは会ってみなさい」

「………はい」

なにも言えなかった。

母の言う通り。ずっと見ないふりをしてたけど、いつまでも今のままではいけないんだって、わかったた。

私はちっとも大人になんてなれてない。

独りで生きていく収入も、力もない。

今はいいけど、いつか両親を亡くして、独りで生きていけるのかって。

今のような生活を、続けていけるのかって。先を想像するのが怖くて、逃げていた。

漫画やゲーム、アニメの世界はそんな不安を忘れさせてくれる。

私は逃げていたんだ。二次元が見せてくれる幸せな世界に。

だけど、昔のようにずっとその世界に溺れたままではいられない……

だって、私は……

心は未熟でも、社会的にも肉体的にも、大人と呼ばれる歳に、十分なつてしまっているから。

(……だからって結婚に逃げようとするとか……。私はほんとにダメだなあ……)

母に突然見合いの話を告げられた翌週。

私はこの歳で着るにはちよつと恥ずかしい振袖に身を包み(いや独身なんだから着てもいいんだろうけど)、某ホテルのレストランに来ている。

別に、こんな振袖じゃなくてワンピースとかでいいじゃんって、言ったんだけど……

『せっかく買ったのに、あんた一回しか袖通してないじゃない!』

と、母の雷が落ちまして……

まあね。成人式の時に着たつきりだもんね。確かにもったいない。

当時は、まあ友達の結婚式とかで着るよとか言ってたんだけど、そんな機会は巡ってこなかったしな……。 (中学の頃の友達の結婚式に呼ばれた時は、遠方だったから着替えやすいドレスで参列した)

でもこう、いかにも『ザ・お見合い!!』って感じで……

は、恥ずかしいよう……

私の隣には、同じく着物を着た母・朱鷺子。

母の向かいには、これまた着物姿の伯母・亜実。

そして私の向かいには、私のお見合い相手……の人……が、い、いらつしやったんですね!!

「……で、こちらが**かほま**正宗さん。高校の先生をやつてらつしやるのよ」

ま、まじかよおとおお!!

私は内心ばっくばくだった。

だって、どうせ三十過ぎて見合いに来るような男なんて、今まで女に縁のなかった筈えない男だろうと、私は高を括っていたのだ。むしろ嘗めていたと言つてもいい。(偏見いけない!)

だから、見合いをすることは了承したものの、どうせ上手くいくわけないからと、ろえず「見合いしちやったよ! 乙!」なんて、自虐っぽいネタに使えるなこれ、プログ

に書くか、と思っただけなのに。

なのに、なんで……

「……こんにちは。柏木正宗と申します」

なんで見合い相手が、イケメンなんだよおおお!!

百八センチはありそうな高身長。仕立ての良いスーツに包まれた身体は細身で、でもほど良く引き締まっていそう。

艶のある黒髪は短く整っていて、切れ長の瞳に筋の通った鼻梁の持ち主。

絶対リア充だろこの人!! しかも眼鏡かけてるううううう!!

二次元ならモロ好み。ストライクど真ん中な外見（黒髪眼鏡）の三十男が目の前に!!

「……はじめまして。峰岸千鶴です」

私はなんとか、接客で培ったよそ行きボイスで挨拶をした。

しかし内心は焦りまくっている。

だっておかしい。おかしいよ。

なんでこんなイケメンが見合いなんてしてるの!! こんな外見をお持ちなら、女なんてそれこそ選び放題だろ!!

ええと、柏木正宗さん。

職業、私立高校教師。専門は日本史。三十歳独身で、結婚歴なし。

ご両親はすでに他界していて、現在は亡きお祖父さんから譲られた一軒家で一人暮らし。

趣味は読書……って。

今回のお見合いは突然だったから、お互いの釣書きなんて用意されていない。

代わりに紹介者である伯母さんが、柏木さんのプロフィールを事前に教えてくれた。

プロフィールだけ見ると、かなり理想的な人だよこの人。

収入は安定しているし、同居なしで一戸建て付き。しかも同じ趣味!!

おまけにこのルックス……

これだけ良い条件が揃ってて彼女がいらないなんて、言っちゃ悪いが何か問題でもあるんじゃないだろうか……

そうじゃなかったら、神様が気まぐれでも起こして、私に一生に一度あるかないかの幸運をくれたとしか思えない。

（ははは……。まさかね……）

そんなに上手くいくわけないと、私は一笑する。

ここに来るまでは「会うだけ。結婚はまだしない」なんて言っていたくせに、いざ見

合い相手がイケメンで理想的な人とわかった途端に「してもいいかも」なんて思う打算的な自分に嫌気が差す。

きつと、柏木さんは「付き合いで断れなかった」とかなんだ。
本気で見合える気なんてないんだろう。

(あー、まあ……)

理想のイケメンを間近に見れて良かったな、と思おう。今回は。

「……………」

しかし……見れば見るほど、素敵な眼鏡。

こう、くいつと眼鏡を押し上げてくれないかなあ……。ちなみに私はツルをくいつ、よりもブリッジをくいつ、に萌える。

なんて、思わず柏木さんに見入っていたらブリッジをくいつとしてくれた。

おお……眼福。そうか、柏木さんはブリッジくい派かあ……

いいよなあ、眼鏡男子。はあ、目が幸せ……

「……………」

柏木さんが訝しげな視線をよこしたので、おおつとやばい見すぎたか、と慌てて愛想笑う私。

愛想笑いは仕事で慣れているのだ。

そうこうしているうちに、私達のテーブルに料理が運ばれてくる。

ちようどお昼時だから、メニューはランチコースだ。実は、このコース料理密かに楽しみにしてたんだよなあ。

美味しいって評判だけど、私には敷居が高くてちよつと……

これはっかりは、お見合い様々サマサマだなと思う。

芸術的に盛りつけられた前菜のサラダをばくり。う、うまあー!!

なんだこれ!!

野菜自体が美味しいのはもちろんだけど、このドレッシングがうまー!!

——この時の私は、眼鏡男子と美味しいコース料理に浮かれていて、「こういう見合いならまあ、たまにはいいかな」なんて思っていた。美味しいものもタダで食べられるし。

そう、この時の私は、柏木さんと会うのはどうせこれっきりだろうと思っていたのだ。

お見合いランチの締め。

最後に運ばれてきたデザートは、プレートに綺麗に盛りつけられたアイスクリームとチョコレートケーキ。

すっごく美味しかったから、父と弟(見合えることを伝えたら何故か帰って来た)

に、お土産みやげで買って帰ろうかなと思つた。二人とも甘党なのだ。ここ、持ち帰り用にケーキ売つてるみたいだし。

「それじゃあ、あとは若い二人で」
「んぐっ……」

おおつと危ない。せつかくの紅茶を噴き出すところだったぜ……

『あとは若い二人で』なんて。そんなセリフ、ドラマの中だけだと思つてたよ、亜実伯母ちゃん。

母と伯母は二人でにこにこ立ち上がつて、あとには私と柏木さんが取り残される。若い二人でつて言われてもな……

何をすればいいのか、わかんないんだけど。

「……どう、しましうか？」

ここで話をするか。それとも定番通り、二人で庭でも散策するか。

選択権を相手に委ねると、柏木さんは少し考えたあと……

「それじゃあ、庭に出ますか」
と、二人で庭を見に行くことにした。

さりげなく私の椅子を引いてくれて、おお……！ 出来た人だなあつて思つ。さすがに初対面だから、手を繋いだりはしなかつたけど。（というかそんなことでき

ないけどね！）

で、これまたさりげなく、草履ぞうりで歩きにくい私に歩調を合わせてくれるあたり、優しい人なんだなあ……つて思つ。

このホテルの庭は、日本庭園。五月の今は、躑躅つつじが花の盛りさかを迎えている。人工の滝もあつて、池には錦鯉にしんぎいが泳いでいた。

錦鯉か……。昔、弟と二人で公園の鯉にパンくずをやつたつけなあ……

鯉の口がぱくぱく動くのが面白くて。いたずらで小石を投げると、鯉はぱくんと呑み込むんだけど、すぐにぼよつと吐き出すのがまた面白くて、ずっと見てたつて。

私が錦鯉を見ると、柏木さんも立ち止まって池を見る。

二人無言で、池を見つめた。

五月の、温かい陽射しに涼しげな風が吹き抜けていく庭。

緑が一番、青々と輝く季節。

ああ、綺麗だなんて。こう……風ないだ気持ちになれる。

洋風の庭も良いけど、日本庭園も好きだ。

「……………」
「……………」
「……………」

「……………」
 「……………」
 「……………」

——って、しばらくぼうっとしていたけど。やっぱり、会話した方がいんだろわか。

でも、なにを喋しゃべったらいんだろな……。定じょうせき石通り、「ご趣味は？」とか？ いやしかし。趣味って、もうお互いわかつてるしなあ……

あ、そういえば趣味は読書、ってことだったけど、柏木さんはどんな本を読むんだろ。日本史が専門って言ってたし、やっぱり時代物とか歴史物が好きなのかなあ……

時代物……。高校時代、司馬遼太郎しばりょうたろうにハマったっけなあ。そしてそのまま転がるように新撰組にハマったわけですよ。新撰組、それに戦国武将はオタク女子の大好物ですよ。ちなみに、三国志も大好きだ!!

男の人って、戦国や幕末、三国志好きが多いって言うし……

それなら、語り合える。(ただし熱く語りすぎて引かれるかもしれないが!)

「……峰岸さんは」

「うはいっ!?」

ちょうど、「三国志好きですか」をどう上手く切り出すか考えていたところに先手を

打たれて、少し声が裏返ってしまった。は、恥ずかしい……

「……鯉がお好きなんですか？」

「へっ？ は、はい……」

イエスカノーで言うならまあイエス。

鯉に対する思い入れはそんなものだけど、予想外の質問に思わず「はい」と答えてしまっつ。

「……そうですか」

「……………」

「……………」

「……………」

つ、続かないー!! 会話、続かないよ!!

どうしよう、これ私も「柏木さんも鯉、好きですか？」って聞くべき？ 聞くべきなの？

でも、それって「こいつどんだけ鯉好きなん!?」ってならないか？

結婚相手の条件は「鯉が好きな男性です」って!? うわー!!

私は人生初の見合い! しかも相手はイケメン!! という非常事態に思考が暴走していた。普通に考えれば、他に話題がないから聞いたんだってことくらい、わかるだろう

に。こっちも話題がないなら、なんでもいいからうまいこと話しかけて話題を振ればいいんだって。それだけだって。

わかってはいる……だけど……！

でも、言葉が出ないんだよー!! 何言ってもいいかわかんないんだよー!!

「……すみません」

「うえっ!？」

独りでテンパっていると、傍らかたわにいる柏木さんが突然謝り始めた。

ええええええええええ!!

「……俺はどうも、口下手で……」

いや。良いじゃないですか無口キャラ。(あ、キャラって言っちゃった)

眼鏡で無口な男子は萌……いや、素敵!! だと思っの!!

「……え、と……?」

「……退屈な思いを、させてしまう」

「たいくつ?」

私は年とし甲斐もなく、きよとんと首を傾かしげる。そんなんしても可愛くねーよ! と、もう一人の自分がツツコンだ気がしたがまあいいや。

ええと……。たいくつ……。退屈?

いやいや退屈って! そんなの緊張のあまり感じる余裕もないですよ!!

理想の美形が隣にいるんですよ!?

むしろ謝るのはこっちですよ! うまく場を盛り上げられなくてすみません!!

「そんなことないです!!」

思っていたよりも大きな声が出て、自分でもびっくりした。

柏木さんも、びっくりした顔で私を見ている。

「ああああいやあの。私もそんなに口が上手い方じゃなくてですね」

「……………」

「私の方こそ、退屈させてしまうと云いますか」

「いや、そんなことは」

いやいやいや! そんなことありますって!!

でも……

「でも、無理して話さなくてもですね」

ああもう! 何を言いたいのかわけわからん。

「その、無理して話そうとしなくても……」

あああ同じこと言ってる……! !

で、でもですね……

ええと。つまり。

私が言いたいのはずね。

「無理して話そうとしなくても……。会話がなくなつて、無言のままだって、居心地が悪いわけじゃない……。です」

話をしなくても。

ほうっと、風景を見つめて。

無言のままでも、全然気まずくなくて。

むしろ、話さなくちゃと意識した途端に焦つて。どうしようどうしようつてなつたから……。ですね。ええと……。つまり――

「柏木さんといるのは、退屈じゃありません。お、落ち着き……。ます」

心臓はどつきどきだけどね!!

「峰岸さん……」

ああ、どうしてもつと上手いこと言えないんだろうな私。

そんな自己嫌悪に陥^{おち}つて、これはうまくいかないパターンだよっばり、なんて思っていたから。

戻り際、

「これ、連絡先です……」

なんて、名刺を渡されて。(裏にケータイ番号とメールアドレスが書かれてた)

「……よかつたら、今度映画でも見に行きませんか」

って、誘われた時は思わず「これなんの死亡フラグ!?!」って叫びそうになった。

これが私達の、最初の出会ひ。

気になる人

見合いの日から三日後の午後。

受け持ちの授業のない時間帯。俺は自分のデスクのある社会科準備室で一人コーヒーを飲みながら、携帯を開く。

メールの着信はない。

とっさに見合い相手の峰岸千鶴さんにこの携帯の電話番号とメールアドレスを書いた名刺を渡したのだが、それから彼女からの連絡はなかった。

見合いの世話人である、保坂亜実さんからも何の連絡もない。これは……『脈なし』ということだろうか。

「まっさむーねセンセ！ コーヒーおくれー!!」

がらっ!! と扉が開く。

入って来たのは白衣姿の男。この学校の養護教諭だ。

「……………」

他の先生方がいないから、まだいいもの……

入室の前には、ノックをするのが礼儀だろう。

これでは生徒達に示しがつかないじゃないか。

そう思っているもの、この男には言っても無駄だとわかっているから、俺は何も言わない。

日頃俺を「正宗」と呼び捨てにする幸村が、職場で「正宗センセ」と呼ぶようになるまで、何度言い直させたことか。（ちゃんと『先生』と言えと注意したのだが、直らなかつた）

そのくせ父兄や来客の前ではきっちり「柏木先生」と呼ぶのだから、普段のこれはわざとなのだろう。

そんな幸村とは、中学からの付き合いだ。ちなみに、二人ともこの高校の出身である。幸村は、明るい茶色の髪を首の後ろで一つに縛っている。この学園は自由な校風で、生徒教職員共に染髪や長髪が容認されている。でなければ、こいつのこの髪型はアウトだろう。

幸村は、人懐っこい容貌の男だ。いつもにこにここと、口元が笑んでいる。

その見た目通り人懐っこく人好きのする幸村は、男女問わず生徒からの人気が高い。

生徒達の悩みを聞くことも多い養護教諭としては、慕われるのは良いことなのだろうが……

「ふっふーん。俺、正宗センスのコーヒー好き」

好きだと言われても、コーヒーマーカーが作るコーヒ―は誰が作っても同じ味だ。それに砂糖を二つ入れて渡してやれば、「わかってるうー」と奴は言う。反応がいちいちうるさい。

「……幸村先生、仕事は？」

「んー。ちよつと休憩中」

大丈夫大丈夫、とカラカラ笑って、幸村はコーヒ―を受け取る。

大丈夫って、その間に具合を悪くした生徒が来たかどうかどうするつもりだ……と、俺の眉間に皺しわが寄っているのに気付いた幸村が、慌あわてた様子で首を横に振る。

「あ、ちがう。ごめんなさい冗談です。今はね、保健室にサボりにきた奴に留守番任せてんの。俺は職員室に用があつて、その帰り」

「……………そうか」

サボりは褒められたことではないが、たまに休みたくなる気持ちはわからないでもない。あまりにひどいようなら、幸村だって対処するだろう。

「そうそう。ところでさ、聞いたよ正宗センス。見合いたんだって？」

「ブフツ」

幸村の言葉に、口に含んでいたコーヒ―を噴き出してしまふ。

幸い、噴き出したのがカップの中だったから良かったようなものの……

これはもう飲めないな。

無言で流しに立ち、カップを洗い始める俺にさらに幸村は言う。

「職員室で、学園長に聞いちゃった！ なんでも、学園長の知り合いの姪めいごさん、なんだって？」

「……………」

学園長め……。相変わらず、口が軽い。

そもそも、今回の見合いのきっかけはこの学園長だ。

「学園長、自分が仲人なこうとやりたいたいばかりに、『自分のトコの、若くて顔のイイ奴を紹介するから誰かいいお嬢さんはいないか？』なんて、探し回ってたらしいじゃん」

「……………」

そうなのだ。

しかもその理由がくだらない。

知り合いの学校経営者が、ある教師の世話役を務めたらしい。その後二人は結婚に至り、彼は仲人として結婚式に出席した。

『それはそれは立派な式だった。さすが自分が結び付けた二人だ』と自慢された学園長は「だったら、自分も！」と発はっ起きしたらしい。

「で、俺か正宗センスのどっちかで悩んでたらしいけど……」

「……………」

そう。学園長は、この学園で二人しかいない独身者であるうちの俺か幸村かで悩み、結局俺を選んだのだった。

さすがに釣書きを作る時間はなかったらしいが、俺のプロフィールを相手に相手方に伝え（個人情報保護法違反で訴えたら勝てるぞ）、俺のところには、相手のプロフィールと共に事の次第が伝えられた。

『二十八歳の娘さんでね、趣味は読書で本屋に勤めているっていうし、柏木君にびったりだと思っただよ』

まったく、寝耳に水とはこのことだと俺は思った。

挙句、『もう向こうにも話がいつてるんだよ。頼む！ 私の顔を立てると思って……』などと。

そう頭を下げられては断れない。

それに、すでに相手に話がいっているのに断るのは失礼かと思って、仕方なく見合いの場に行くことにした。

結婚……か。願望がまったくないわけではなかったのだ。

高校時代に両親を亡くし、その時俺を引き取ってくれた祖父も大学在学中に亡く

なった。

以来、祖父の残してくれた一軒家で一人暮らししている俺は、たぶん温かい家庭というものに憧れを感じている。

在りし日の父と母のように、お互いを尊敬し合い、支え合えるような人と結婚できたら……と。

しかし、俺は生来の口下手が災いして、恋人と長く続いたことがない。

まして、忙しいこの職業……。恋人のために割ける時間が少なく、たまのデートでもあまり気の利いたことを言えない俺に、大抵の女性は愛想を尽かして離れていった。

面白味のない人間だ、という自覚もある。

正直、恋人とデートするよりも空いた時間は本を読んだり、授業に使える参考書を探したりしたい……と想っている俺の方に、別れの原因がある。

同業者なら、と思ったことはあるが……

この学園には独身の女性教師がいない。私立校故に新規採用はほとんどないから新しい出会いもなかなかない。

だから、見合いで相手を探した方がスムーズに結婚できるかもしれない（相手も最初から結婚を意識しているだろうし）……という気持ちも少しだけあって、学園長の話を了承した。

「ま、俺のトコに話持ってこられても、断ってたけど」

「……………」

幸村には、人には言えない恋人がいる。

その恋人は生徒ではないが、周りに知られると少し困ったことになる相手だから、この学園で俺の他に知っている者はいない。

本人も言っているように、もし学園長が今回の話を幸村に持っていったら、『無理でーす』の一言で一刀両断いちどうりょうだんだったろう。

「で、どくだったの？ 正宗センセ」

見合い相手、可愛かった？ 幸村にそう聞かれて、俺はあの日のことを思い返した。

指定されたホテルで待っていた、学園長の知人・保坂亜実さんに案内されて向かったレストランのテーブルには、着物姿の二人の女性がついていた。

それが、見合い相手の峰岸千鶴さんと、その母親の朱鷺子さん。

「はじめまして。峰岸千鶴です」

緊張しているのか、少し強張こわばった顔で言う彼女は、聞いていた歳よりもずっと若く見える人だった。小柄な身体つきのせいなのか。大きな瞳が印象的な童顔のせいなのか。

お互いに口数の少ない見合いの席で、彼女の表情が和らいだのは、料理が運ばれて来

てからだった。

年配の女性二人が「あら、美味おいしいわねえ」「本当ね」と楽しげに食べ進む中、彼女は無言のまましばらくと料理を口に運んでいく。

しかし、目は口ほどに物を言う……というが。

彼女の目はキラキラと輝いていて、料理を口に含んだ瞬間幸せそうに緩ゆるむ表情がとても印象に残った。

美味しそうにものを食べる人だな、と。

その後、二人きりになって庭に出ることにしたのだが……

俺は、まるで猫のようにじっと池を見つめている彼女の横顔から、目が離せなかった。彼女の表情は、面白いほどくるくる変わる。

最初の、緊張した表情。

料理を食べている時の、幸せそうな顔。

そして、今は池を見ながら何か考えているのか、難しそうな顔をしたり、気持ち良さげに目を細めたり。かと思いきや「はっ」と目を見開いて何か思いついたような顔をする。

そんな風に、景色ではなく峰岸さんを見ていたら……

ふいに、不安が過よきった。

彼女は、俺がずっと黙ったままで気分を害してはいないだろうか、と。今まで付き合ってきた女性達にさんざん言われてきた、「どうして黙ってるの?」「話すこともないってこと?」「機嫌悪いの?」という言葉が思い返される。女性にとって、無口な男は不快らしい。まして彼女とは初対面なのだ。

やはり、話をしないとまずいよな。

俺の方から声をかけるべき……なのだろう。

そう思って、ようやくかけた言葉が「……鯉がお好きなんですか?」で。あれは我ながら、間抜けなことを聞いてしまったと思った。

案の定、峰岸さんはびっくりした顔で、「は、はい」と答えた。

そして、互いに無言のままますます雰囲気になり……

俺は、やってしまったと思った。

どうして幸村のように、愛想良くふるまえないのだろう。

しかし、相手を退屈させてしまう悪癖あくへきを謝罪する俺に、峰岸さんは――

「そんなことないです!!」

と、小柄な彼女から発せられたとは思えないほど大きな声で否定してくれた。

「ああああいやあの。私もそんなに口が上手い方じゃなくてですな」

「……………」

「私の方こそ、退屈させてしまうと言いますか」

「いや、そんなことは」

ない、と思う。

彼女は、なんとというか……

見ているだけで、面白いと思う。

「でも、無理して話さなくてもですね」

峰岸千鶴さんは、言いたいことを上手く伝えられなくてもどかしい、といった風にとだどしく言葉を紡つむぎながら、必死な様子で言った。

「その、無理して話そうとしなくても……」

そして、彼女の言った言葉は……

「無理して話そうとしなくても……。会話がなくなつて、無言のままだって、居心地が悪いわげじゃない……です。柏木さんというのは、退屈じゃありません。お、落ち着き……ます」

この場をセッティングしてくれた学園長に、素直に感謝したいと思うほどに俺の心に響いた。

この人となら、もしかしたら……

そう思った俺は去り際に、

「これ、連絡先です……」

と、日頃持ち歩いている名刺の裏に連絡先を書いて渡したのだが……もしかして、あれがまずかったのだろうか。

こういうことは世話人を通して申し出ないとまずいのか？

「正宗センセ？ おーい……」

しかし、世話人を通したら峰岸さんも断りにくいかもしれないし。

かといって、初対面の女性から携帯番号やメールアドレスを聞き出すのも……

「おーい……ねえ、おいつてば。正宗!!」

「っ!!」

幸村に呼ばれて、はっと我に返る。随分長い間、思いふけていたようだ。

手に持っていたカップは水ですっかり綺麗に洗われていた。蛇口は無意識のうちに締めていたらしい。

俺はため息を一つ零すと、傍にあつた布巾ふきんでカップを軽く拭き、コーヒーメーカーから新しいコーヒーを注ぎ入れる。

「……悪い。ぼうつとしてた」

「んー。別にいいけど。で？ どんなコだったの？」

「……それは」

峰岸千鶴さん……は。

「……可愛らしい、人だったよ」

幼さの残る風貌。

キラキラと輝く瞳。

そして、くるくると変わる表情。

彼女からの連絡がないかと気になって、休み時間の度に携帯をチェックしてしまうくらいには。

俺は、彼女のことを意識していた。

「ふーん。うまくいくといいね」

「……………」

だと、いいんだが……

しかして、その日の夜。

寝る前に確認した携帯には、一通のメールが届いていた。

件名には、『峰岸千鶴です』の文字。

そして本文には、連絡が遅れたことを謝罪する一文と、彼女のメールアドレスと携帯番号が書かれていた。

それを見た俺は、思わず拳をぎゅっと握り締めていた。

* * *

「や、やっちまった……」

お見合いから三日後の夜。

私、峰岸千鶴は自室のベッドの上で携帯を握り締めて呟いた。

メール……送っちゃったああああ!!

あのお見合いの日、柏木さんから名刺を渡されて以来、ずっと私は悩んでいたのだ。連絡すべきだろうか……と。

するとしたら、電話？ メール？

いやしかし、電話だと相手の都合がわからないし……。 (というか、電話で話す勇気がないだけなんです!!)

かといって、メールは何と打ったらいいのかわからないし……

それに、いつ送ればいいのか……？

朝だと「こいつ、はりきってる」と思われるかもしれないし……

日中は……仕事してないのか暇なのか、とか思われるかな？

昼休みを狙うにしても……。そもそも、先生の昼休みって生徒と同じ……でいいんだよね。

あれ？ 高校の昼休みって十二時だっけ？ 一時？

あああもう覚えてない！ それに学校によって違ったりするのかなあ。

夜っていう手もあるけど、あんまり遅いと迷惑じゃ……。 って！

もおおとおお!! わかんない!! わかんないよ!!

頭がぐるぐると混乱して、悩みすぎてどうしようもなくて。

こりゃいかん……。手に負えん……。!! と、泣く泣く、友人に事の次第を伝えてアドバイスを求めようと電話したら……

『それ、なんて乙女ゲー？ 攻略サイト見ろよ』

って言いやがるしいいいいい!!

失礼な!! これはゲームじゃないよ、信じられないけど現実だよ、リアルだよ!!

ゲームだったら迷わず『電話』するよおお!!

電話して、デートの約束取りつけて、相手好みの服を着て、待ち合わせの場所に行つて、ナンパ男に絡まれて、そこに相手が助けに入ってくれて「遅れてごめん」って言われるよおお!!

あ、なんか泣けてきた……

本当にね、リアルな恋愛にはまったく免疫めんえきがないよ、私……
 ああ、現実の恋愛にも攻略本があればいいのに……

そんなことを思いながら、何度も何度も本文を打ち込んで消し、を繰り返して。
 最後は『もうどうにでもなれ！』って気持ちになってしまっ、メールの本文はかな
 りシンプルな内容になった。

件名に、自分の名前。(だって柏木さん私のアドレス知らないから、件名で名乗って
 かないと……)

本文には『連絡が遅れてごめんさい。私のアドレスと、携帯番号です』って一文を
 添えて、自分のメアドと携帯番号を……って。ああああ!!

「私、馬鹿じゃないか!!」

アドレスなんかわざわざ本文に書かなくても、そのまま送信元のメアドを登録すれば
 済む話だ。しかも、私のアドレスには好きなキャラの名前が入ってるううう!!

「うああああ!! 恥ずかしいいい!!」

『送信しました』の画面のままの携帯を握り締めて、ベッドの上でのうち回る私。

メアド変えておけばよかったああああああ!!

そ、そこまで気にしないよね?

それに、あんまり知られてない作品のキャラだし、だ、大丈夫……だよ、ね……?

うああああああ!! もう!! 三次元の男の人と接するのって、ものすつごく疲れ
 る!! 誰か私に回復アイテムを!! プリーズ!!

——と、ごろんばたんしていたら、携帯からキャラクターソング、略してキャラソン
 が鳴り始め、メールの着信を伝えてくれる。

「ふおっ!!」

慌てて受信箱を確認すると『柏木正宗です』の文字。

「……………」

へ、返信来たっ。

『メール、ありがとうございます。嬉しいです。』

峰岸さんは、映画は好きですか?

もしよかったら、今度の日曜に一緒に観に行きませんか?』

「……………い、行きますうう!!」

その後も私は、何度ものうち回りながら頭をフル回転させてメールのやりとりをし
 て、初デートってやつに臨むことになりました。

初デートまで、あと一週間もないよ……!!

ああっ、服……!!

どんな恰好していけばいいのおおお!!

二人の初デート

あのメールのやりとりからあつという間に時は過ぎて、とうとうデート当日を迎えました。

日曜日。職場は忙しいんだけど、同僚が「初デートなんでしょ？」「頑張つて来いよ!!」と快くシフトを代わってくれました。

ありがたい……けど。

やっぱり緊張するよー!! うあー!! ドキが胸々……じゃない。胸がドキドキするよ!!

デートの場所は、映画館。

これから公開される映画の予告編が流れている劇場内で、私の隣にはお見合いで知り合った黒髪眼鏡のイケメン高校教師、柏木正宗さんが座っている。

うう……三次元の男の人とデートなんて、ぶっちゃけ初めてですッ!!

でも、幸いと申しますか……

映画で良かった! 少なくとも上映中は無言でいられるもんねっ!! 無理に会話し

ようとしなくていいもんねっ!!

で、でもですね……

やっぱり緊張しちゃって、ついつい手がさつき買っておいたアイステイヤーのカップにばかり伸びるのですよ。あー、喉が渴く。

はっ!! でも待てよ……!! このペースでぐいぐい飲んで、途中でトイレに行きたくなったら……

想像して、私はおず……とカップを戻す。映画の途中で席を立つとか、「ああ、トイレか」つてわかっちゃうよね。恥ずかしい!! なんか嫌だ!! 途中で席立つの恥ずかしい!! ……………。の、飲むのはちょっとずつにしよう……。うん。

そしてこれまたついつい、間を持たせようと手が伸びてしまうのがポップコーン。

二人で食べましょうって、Lサイズを買っておいたのだ。溶かしバターたっぷりやつ。

ふふふ、映画の楽しみの一つだよねえ……。バターたっぷりポップコーン。

……つて、はっ!! あんまりがつついたら、「こいつどんだけ食うの」とか思われる!! それに、き、気になるかなやつぱり……。映画の最中に隣でポリポリポリ。

……………ちよ、ちよとつづ!! ちよとつづつ食べよう!!

あんまり音を立てないように、口の中で溶かして呑み込めばいいよね!!

(……と、いうか……)

本編始まる前から、すでに疲勞困憊ひろうこんはいですよ私……。はあ……

ため息をアイスティーで呑み込み(あまた飲んじやった……)、ポップコーンを音を立てないよう、モシ……っ、モシ……っ、と舌で溶かすように食べているうちに、映画の本編が始まった。

選んだのは、テレビでも話題の洋画。ちなみにラブストーリーじゃなく、ヒューマンストーリー。感動系。

デートならラブストーリー選べよ！と思っちなかれ!!

だって気まずいでしょうがああああ!! 洋画のラブストーリーは高確率でエロシーンが入るんだぞ!! 目の前で濃厚なラブシーンとか、気まずいわああああ!!

ちなみに、アクシオンは……私あんまり見ないし。時代物……も観たかったけど、観たあとに熱く語りすぎて引かれる自信があった。

アニメは論外!! (本当は一番見たかったけど)

で、無難な感動系ヒューマンストーリーにしたんだけど、外れじゃないといいなあ……。前評判はそこそこ……って、お!!

こ、この声……!!

あの声優さん……っ!? うわ、うわ、ちょっと、一気にテンション上がったんだだけ

ど!!

大好きな声優さんが予想外にも吹き替えをやっている、この映画にして良かった!! 吹き替え版にして良かった!! と思った。

ああ……良い声だなあ……とうつとりしながら聞き惚れているうちに、ストーリーにも引き込まれていく。

こ、これ……。普通に面白い……!!

じーっと画面に見入りながら、私は無意識のうちにポップコーンに手を伸ばした。

すると――

「あっ」

ちょうど柏木さんもポップコーンに手を伸ばしていて、指が触れ合ってしまった。

画面から視線を外して、思わず隣の柏木さんを見ると……

「……………」

すみませんって、視線で謝られて。

ほ、微笑ほほえまれた……!!

「……っ!!」

触れた指先が、あ、熱い!!

というか、あの、こいつ指先ベタベタしてる、ポップコーン食べすぎって、思われて

ないかな!? うわ、うわああああ!!
 何だかバツが悪くて、私はさっとスクリーンに視線を戻した。
 し、心臓が……

心臓が、バクバクするよおおおお!!

柏木さんの指に触れた、私の指先。

バターの油が気になるから、できればハンカチで拭いてしまいたい……っ。

だけど、柏木さんの指に触れた直後にハンカチで拭くとか、感じ悪いよねっ!

結局私はバターで汚れた指を、自分の膝の上で持て余してしまっ。

(な……なんだこれ……。なんだよ……。もう……)

乙女ゲームとかで、二次元男子に当たり前のように感じていたときめき。

だけど、三次元男子を前にすると、こんなにも……

(……………)

こんなにも、些細ささいなことでも……

どうしていいか、わからなくなる。

心の動揺を振り払うように、映画に集中した。

そうしたら、クライマックスで大泣きに泣いて。(こ、声は我慢した……ッ! たぶ

ん!!)

私は一つ、学んだのです。

デートで号泣モノの映画は、マズイ!!

気合いを入れた化粧が、ぐっちゃぐちゃになる……!!

映画のエンドロールの途中、まだ暗い場内も顧みず私はトイレに向かった。

恥ずかしかったけど、背に腹はかえられない。

明るくなって、柏木さんに顔を見られる前になんとかしないとっ、この化粧……っ!!

急いでお化粧を直して、映画館を出たあとは二人で近くのカフェに入ってお茶をしま

した。

お見合いの時よりは、話せた……かな、と思う。(映画の感想とか、お互いのこと……

とか)

その時、「またメールしてもいいですか?」って言われて、あまりにもびっくりした

から、飲んでいたメロンソーダがゴフッって気管に入っちゃって……

涙目になりながら領うんずきました。

これが私達の、初デート。